

UNWTO・観光庁共催「遺産観光に関する国際会議」 報告

国連世界観光機関(UNWTO)と国土交通省観光庁は2016年2月25日に東大寺総合文化センター(奈良市)に於いて「遺産観光に関する国際会議」を奈良県の協力のもと開催し、遺産観光のブラッシュアップ、魅力づけ、持続可能な活用について議論を行いました。世界各国の政府及び民間の観光関係者、国際機関、学術機関から185名(国内128名)が参加しました。

冒頭で国土交通省観光庁古澤ゆり審議官が「観光」は日本にとって最も重要な政策であり、この度UNWTOの理事国入りを果たしたことにより、今後更にUNWTOとの連携を深めていきたいと開会挨拶を行いました。またUNWTOアジア太平洋部黄海國副部長は日本の観光客到着数は2015年11月までの前年同期比で45%増加し素晴らしい成長を遂げていると述べ、UNWTOでは今後は文化と観光を専門とした部署を持ち、観光と文化の融合について更に研究を行っていききたいと述べました。続いて奈良県浪越照雄副知事は参加者に対し奈良県で開催した同会議の参加に対し歓迎の意を表しました。

以下各セッションごとの主な内容

セッション1「保存と活用の両立」

文化遺産を観光資源として活かしながら、その文化的価値をいかに保存していくか

モデレーター 和歌山大学観光学部副学部長 加藤久美教授

・ジョージワシントン大学(米国)のドナルド・ホーキンス教授は「遺産保全の促進及び訪問客が地元の文化に触れることができる世界の最良事例」について発表を行いました。カンボジアのアンコールワット寺院が観光客の受入れ増加とともに都市化が進んだように、観光成長を遂げている場所は主に都市であると述べました。また持続的に観光地を発展させ保護する為には官民の連携が重要であると述べました。同氏は「歩ける都市(WalkUPs)」が車の利用が多い都市部でどのように導入されたか例をあげ、人が歩いて移動できるということは地域に根ざした文化体験ができるとともに低炭素であり、都市開発及び観光地にとって重要であると説明しまし

た。また遺産観光地までの交通の利便性の向上は、訪問客の増加及び訪問客に質の高い体験を提供する可能性を高めていると述べました。

・国連教育科学文化機関(UNESCO)アラブ地域センタームニール・ブシュナキ所長は「遺産の保護及び活用の課題と機会」をテーマに遺産地域の保護における UNWTO 及び UNESCO の活動及び学術機関及び観光部門の連携により観光が与えるマイナス面の影響を最小限にすることができると述べました。またアンコールワット寺院は地元の人々及び宗教者にとって観光目的地としての価値だけではなく地域の生活の一部であると説明し、世界遺産の登録にはデスティネーション（観光目的地）管理計画を盛り込むよう国際機関が促すべきであると述べました。

・北海道大学観光学高等研究センター西山徳明センター長は「日本における遺産管理と観光」をテーマにリビングヘリテージ（生きた遺産）の概念及び DMO（Destination Management Organization）を通したリビングヘリテージの保護について述べました。リビングヘリテージとは生活に生きついているもの(living thing)及び住宅、有形・無形遺産、地元地域を含むと説明しました。地域に根差した観光(コミュニティーベースドツーリズム:CBT)は観光を通してすべての地元の人たちに恩恵を与え、竹富島がリビングヘリテージの管理における最良事例だと説明しました。島を訪れるほとんどの観光客は島での滞在期間が一泊であるため経済効果に限界があるが、同島におけるリゾートの開発は伝統的な建築を生かし地元社会に恩恵を与え、将来の開発に制限を加えながら成長させていると述べました。

セッション2 「観光資源の磨き上げ」

文化的な遺跡や建造物を、どのように磨きあげて世界遺産等の国際的な知名度ある遺産にするのか

モデレーター UNWTO アジア太平洋センター ハーモニー・ラム事業・広報課長

・日本旅行業協会(JATA)越智良典 理事・事務局長が「価値創造産業として世界遺産に新しい生命を吹き込む」をテーマにプレゼンテーションを行い、日本の修学旅行は世界遺産の訪問を通じて学生の文化への理解や鑑賞といった心を育てていると述べ、修学旅行生が茶道を一年前か

ら学習をして春日大社（奈良市）における献茶式に参加した例を紹介し、世界遺産を活かした独特な価値ある文化体験について述べました。こういった教育効果を踏まえ、修学旅行をアジア各国に薦めていると説明しました。また 2015 年 2 月にカンボジアで開催された

「UNESCO/UNWTO 観光と文化」における国際会議で「シェムリアップ宣言」が採択されたことに触れ、文化と観光部門の間のパートナーシップの構築の重要性について説明し、観光業界においても持続可能な観光の重要性や取り組み強化に重点を置き国連の持続可能な開発目標 (SDGs) に貢献していきたいと述べました。

・田辺市熊野ツーリズムビューロー竹本昌人事務局長は「持続可能な観光に向けて」をテーマに田辺市における特に小規模グループを対象とした持続可能な観光に向けた取り組みについて述べました。同市はブームよりもルーツに、開発よりも保全に、マスツーリズムよりも個人旅行を重視していると述べました。また受入れ対策として世界遺産熊野古道ルートにおける標識及び温泉など目的地の英語併記の統一を行政と取組んでいる例を挙げました。また海外への情報発信においては同ビューローのブラッド・トウル(カナダ人)プロモーション事業部長の活動について紹介し、海外の業界向け及びプレスツアーの実施、外国人に対し質の高い情報発信を行っていることと述べ、ハード及びソフト面での取り組みについて述べました。また海外との取り組みにおいて同市はスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ市と観光交流協定を結んでおり、聖地巡礼をテーマにした共同プロモーションについて述べ、サンティアゴ・デ・コンポステーラ市の教会で修験道を披露するといった画期的な取り組みを挙げました。

・クイーンズランド大学(オーストラリア)地球変動研究所教授インクルーシブミュージアム アマルスワルガラ所長は「遺産観光と持続可能な開発目標(SDGs)」をテーマにインドのアマラバティー(Amaravati)仏跡における遺跡の復元及び観光振興、ベトナムのホイアンの取組について述べました。アマラバティーは大乗仏教の生誕の土地であるが、多くの無形遺産の消滅が始っており、地元の子供たちに文化遺産の保全の大切さを教育することで復興を遂げていると述べました。また同地域における貧困状態はまだまだ続いているので地元が地元を救うというコンセプトが重要になってきていると説明しました。最後に地元地域が保有するベトナムのホイア

ンの家々は観光を通じた保全活動により崩壊の危機から脱しました。観光資源を保存し磨き上げる為には地域住民が第一に地域の遺産について理解しなければならないと述べました。

セッション3 「持続可能な活用にむけて」

世界遺産登録などで注目を浴びた観光地が、どのように持続的に観光客に魅力を発信し続けるのか

モデレーター 国土交通省観光庁 高橋良明参事官（国際関係）

・バルセロナ大学、遺産創造文化観光研究所(LABPATC)ジョルディ・トレセラスフアン所長は「遺産観光と持続可能性」をテーマにスペイン及びラテンアメリカの事例を挙げてプレゼンテーションを行いました。メキシコのフォーシーズンズホテルでは郷土料理の料理教室の実施や地域の文化をテーマに議論を行う会議の同国の文化を紹介する「カルチャーコンセルジュ」を起用し事例について説明しました。また地域の文化が経済力を牽引し地域振興を目指すクリエイティブツーリズムを例にあげ説明しました。

※クリエイティブツーリズム

UNESCOは「芸術や遺産、地域特性を学ぶことで、旅行は参加型かつ本物経験志向となり旅先の人々とその生きた文化の創造を結んでいく」としています。

・アンコール地域遺跡保護管理機構(APSARA)ソック・サンバー副総裁は「アンコールワット寺院：文化と観光のデスティネーション」をテーマにプレゼンテーションを行い、数多くの観光客が訪れるアンコールワット遺跡に関し、同寺院の規模から重要なのは観光客の数の問題ではなく管理であると述べました。また、古い遺跡を復元させる事業及び交通渋滞を解消するインフラの再構築、若者の遺跡復元の参画は遺跡を敬う心を育てるという意味で重要であると述べました。昨年同機構によって更新されたアンコールワット寺院行動規範(Angkor Wat code of conduct)について述べ、観光客が守らなければならない項目（露出の多い服を着ない、地域の子供にお金やキャンディーを与えない、宗教者の写真を撮らないといった宗教者への敬意、遺産に手を触れない等）を説明しました。

・最後の発表者の国土交通省観光庁観光資源課 長崎敏志課長は「我が国における世界遺産の持続可能な活用に向けた取組について」をテーマに1995年に世界遺産に登録された白川郷についてプレゼンテーションを行いました。世界遺産登録後白川郷への観光客は増加しているが、世

世界遺産登録を受けた他の日本の観光目的地に関して、登録直後は観光客が増加しているが、その後減少していることを説明しました。白川郷への観光客が増加しているのは、①地元の幅広い関係者の協力 ②観光資源としての魅力向上 ③他の地域との連携にあると述べ、村営の駐車場の収入の一部を「世界遺産保存協力金」として資源の保全に活用するというスキームを紹介しました。

この会議では遺産及び観光の相互依存を確認し、日本及び世界においていかに資源を管理し遺産の価値を高めるかに焦点を当てた議論が行われました。講演者は地元地域の实在価値を損なうことなく遺産価値の活かす方策について様々な専門性及び見解を提示し、各セッションの質疑応答では参加者からは講演者に対する率直な質問が寄せられました。参加者は地域の遺産を世界遺産にすることが目的ではなく、先を見越した管理が重要であることや遺産の保護は政府だけでは予算に限りがあるので、地元地域自身が遺産を守る決意が必要であること、観光客数を増やすことだけではなく、地元の文化を共有してもらうことが大切であるなど、今後の遺産観光のあり方について理解を深めました。

翌日、奈良県主催による明日香村及び葛城市へのテクニカルツアーが行われ、海外からの参加者に対し、遺産の保全及び活用の取組みが紹介されました。会議及びテクニカルツアーを通して、日本及び世界にとって重要なテーマである、文化的遺産を「いかに持続可能に管理し、磨き上げ、魅せ、守るか」ということを考える良い機会となりました

プログラム、講演者のプロフィール、各プレゼンテーションについてはこちらのウェブサイトをご覧ください。 <http://www.icht2016.com/index.html>

※プログラム(programme)をクリックすると各プロフィール及びプレゼンテーションがダウンロードできます。



国土交通省観光庁古澤ゆり 審議官



UNWTO アジア太平洋センター黄海國副部長



奈良県浪越照雄副知事



セッション1



セッション2



セッション3



質疑応答の様子



会場の様子